

フランス映画をいかに教えるか？

藤 本 恭 比 古

フランス映画を授業でいかに活用するか、これがわれわれの課題である。じっさいわれわれが教室で映画を利用する際、大きく分けると、ふたつのケースがある。フランス語の訳読をおこなう講読の授業と、フランスの文化・文学を講じる授業である。はじめの講読の授業の場合、普通、二種類の教材を使っている。ひとつは、映画化された文学作品。いまひとつは、映画のシナリオである。前者の場合、文学作品の単なる訳読に比べ、学習者の作品理解は、映画の鑑賞によって一段と深まることは言うまでもない。一方、後者の、シナリオの訳読は、当然のことながら映画鑑賞に支えられている。いずれにせよ、フランス語読解力養成の一助として、映画を利用することに変わりはない。

ところが、映画は、映像に音声に伴うものであるから、活字を延々と訳してゆく訳読の作業に比べると、言語習得という観点からすれば、極く自然に外国語の運用にふれ、それを学ぶことのできる誠に便利な文明の利器というほかはない。この映画のもつ特性を活かし、読む、聞く、話すという語学能力を養うことはできないだろうか。われわれは、エリック・ロメール監督の作品が、こうしたわれわれの願望をかなえてくれはしないか、と考え、同監督の作品シナリオをもとに作成された教科書を使用しながら、¹⁾ ロメール作品が切り拓いた映画の可能性を吟味することにした。

ところで、「少しフランス語の会話ができるようになったら、E.ロメールの映画などお勧めです。自然な日常会話を聞きとる練習になります」²⁾ と、東京外国語大学の川口裕司教授がご指摘の通り、ロメールの映画の特徴のひとつに、「自然な日常会話」がある。それだからこそ、日本でも多くの教科書版が刊行されたのだらうし、フランス本国でもフランス語を学ぶ外国人が効率よく学習をすすめることができるように、ロメール作品をもとにしたマニュアルが作られたのだらう。

じっさい、そうしたマニュアルのひとつ、ジャンヌ・クルティヨン、ジュヌビエーブ＝ドミニック・ド・サラン編著『人生の映画1』（ディディエ社、1996年）の編著者によれば、エリック・ロメールの映画が、現代フランス語の話し言葉を勉強するのにどれだけ助けになったかを語る外国人学生が実に多いという。そこで、こうし

たロメールの作品のシナリオから抜粋をおこなって、話し言葉の速修のために、さまざまな状況でおこなわれる会話を単に学習するよりももっと迅速に、しかもかなり高い水準の口頭理解を可能にする方法の提示をおこなったという。学習のはじめから完璧な理解を目指すことはしないが、**理解こそ外国語習得の基礎である以上、聴解および新出の構文と語彙の理解を十分におこなってこそ、学習者の発言や自己表現を可能にする知識は徐々にまた暗々裏に獲得されるということ、そしてこうした知識のみが口頭表現能力に対して効果があることは、言語習得の研究分野で十分に証明されている、**というのである。³⁾



まず、この教材から一部を引用し、具体的に話をすすめよう。映画Le Beau mariage（美しい結婚—玉の輿結婚の意）からの抜粋。場面はレストラン。女子学生サビーヌと、35歳の独身弁護士エドモンとの対話、全66行の冒頭部分である。⁴⁾

Sabine : Choisissez pour moi.

Edmond : Mais je ne sais pas ce que vous aimez !

Sabine : j'aime tout. Tout ce qui est bon. Et puis je préfère que tout le monde mange pareil. Quand on est chez quelqu'un, on ne dîne pas à la carte.

Edmond : Je préfère, moi aussi. Dans ce cas, à vous de choisir.

サビーヌ「私の代わりに選んで。」

エドモン「何がお好きなのかわかりません。」

サビーヌ「何でも好きです。おいしいものなら何でも。」

それから、皆が同じものを食べるほうが好きなんです。だれかの家で食事をする時、メニューで選んだりしませんよね。」

エドモン「僕もそのほうがいい。そういうことなら、あなたが選んでください。」

教科書にはグローバル・アプローチとして、1.

Avez-vous une idée des rapports entre les deux personnages : Edmond et Sabine ? をはじめとする三つの質問が添えられている。この設問に対して、この教科書ですめられている方法は、フランス語母語話者の教師の指導のもとで、まず教師の介在なしにフィルムを見た後、生徒たちが自由に自分の理解したことを話す時間を持ち、その後ではじめて設定された質問に答えるようにするというものである。そして、この項目の質問は、必要があれば、後でこの場面を総合するのに役立つ、と付け加えている。しかし、それに対して、日本語母語話者のフランス語教師の場合は、次のような認識に基づいた授業展開を考えるかもしれない。対話全体をもとにして、この質問に答えるためには、聴解力以前に、ある程度のフランス語読解力が要求される。スクリプトをある程度、把握できる力があれば、たしかに「自然な日常会話を聞きとる練習」をおこなうことができるだろう。たとえそれほど語学レベルが高くない場合でも、辞書を用いてこうしたフランス語をきちんとした日本語に訳すことは、現代フランス語の口語体を理解する力を養うだろう、と。いわゆる訳読中心の語学授業ということである。たしかに、この両者の授業展開の違いは顕著であるが、しかしながら、決定的なものではなく、両者の方法は互いに補い合い、それぞれの利点を発揮できるように思われる。著者が挙げている第三の道がある。それは、独習のために示されている次のような方法である。

まずはじめ設問を読まずに、視聴すること。次いで理解したことを（もし答えることができるなら）確かめるため、本文は参照してもよい。二回目の視聴は設問に沿っておこなう。ただし、この全体理解の段階にあまりに時間をかけてはいけな、というものである。われわれは、この独習方法を導入しつつ、フランス語ではなく日本語で議論をおこなったり、分かりにくいくだりは正確な日本語に置きかえたりして、さまざまな授業展開を工夫することができるのではないか。

グローバル・アプローチの 1. について見てみよう。Avez-vous une idée des rapports entre les deux personnes : Edmond et Sabine ? 「エドモンとサビーヌの関係をどう思いますか？」⁵⁾ という質問は、別の言い方をすると、A votre avis, quels sont les rapports entre les deux personnes : Edmond et Sabine? 「あなたの意見では、エドモンとサビーヌふたりの登場人物は、どういう関係ですか？」ということもできる。この質問に対しては、レストランの場面全体を一度、視聴した後に答えるように指示されている。ただ、上の僅かな会話からだけでも、察せられることがある。話し手と話し相手との関係は、言語学的に見て、友人関係とは言えない。なぜなら、お互いに相手を、vous で呼んでいるからだ。「普通、未知の人、目上の人、密接な関係にならない人に対してはすべて vous を用いて話す」(On vouvoie

normalement les inconnus, ses supérieurs et toutes les personnes avec qui on n'a pas de liens étroits.) と、vouvoyer の説明にはある。これは、じっさい日常的に確証される事実である。とにかく、互いにまだ相手のことをよく知らないようなのである（「何がお好きなのかわかりません」）。この問題は、先でもう一度言及したい。

詳細な理解度をチェックする設問は重要である。

1. Sabine donne le menu à Edmond. (サビーヌはエドモンにメニューを渡します) Pourquoi ? (何故ですか?) Quel argument donne-t-elle ? (彼女はどんな根拠を挙げていますか?) 2. Edmond lui rend le menu. Pourquoi ? (エドモンはメニューをサビーヌに返します。何故ですか?) 以上の問いは、引用のセリフに対応している。ところで、この段階は、理解能力の向上にもっとも重要であり、じっさい、大部分の設問は対話を正しく理解することを求めている。だから、設問に答えるためには、必ず何度もそのくだりを聴きなおす必要がある。明らかに、このメソッドの要諦はここにある。著者は、耳が語を特定することに慣れるには、そして、聴解能力を徐々につけてゆくには、この方法しかない、と力説している。

授業と独習の場合、具体的には次のような仕方、聴き取りはおこなわれる。たしかに設問のおかげで、教師は生徒の理解度をチェックできる。しかし、設問は、生徒の自発的な聴き取りの代わりにはならないから、生徒は設問に答える前に、セリフが発せられる都度、理解したことを、あるいは、理解したと思ったことを口にすることが望ましい、という。日本人教師の場合も同様に、聴き取りのサポートはできるだろう。独習の場合、もし何度聴いても、対話が十分に理解できなければ、スクリプトを参照することができる。必要なら辞書も参照してよい。そして次に、本文の理解がきちんとおこなわれるまで、スクリプトなしで対話を聴き直さなければならないという。重要なことはあくまで、聴き取りによる理解、聴解なのである。

具体的に見てゆこう。問題 1. Sabine donne le menu à Edmond. (サビーヌはエドモンにメニューを渡します) Pourquoi ? (何故ですか?) Quel argument donne-t-elle ? (彼女はどんな根拠を挙げていますか?) 以上の問いに答えるために参照が必要なのは、次のセリフである。Sabine : j'aime tout. Tout ce qui est bon. Et puis je préfère que tout le monde mange pareil. Quand on est chez quelqu'un, on ne dîne pas à la carte. である。「私は何でも好き。おいしいものなら何でも。それから、皆が同じものを食べるほうが好きなの。誰かの家にいるときに、メニューを見て食事はしないでしょ」

サビーヌが, Choisissez pour moi. 「私の代わりに選んで (決めて)」と、それほど親しくない相手に高飛車に料理の注文を命令したのは、その人が好きなものを食

べて欲しいという思いやりからではないか。そして、それは同時に、相手の選んだ料理を自分は何でも食べる用意があるということでもあるだろう。こう考えると、解答のひとつの可能性として、Parce qu'elle voudrait laisser Edmond choisir ce qui lui plaît. (彼女はエドモンに彼の好きなものを選ばせたいから) 根拠としては、Elle aime tous les plats et préfère que tout le monde mange pareil. (彼女はどんな料理も好きだし、皆が同じものを食べるほうが好き)

問題2. Edmond lui rend le menu. Pourquoi? (エドモンはメニューをサビーヌに返します。何故ですか?) エドモンは彼女と同意見ということだろう。とすれば、彼女が選んでもよいはずだ。解答は、Parce qu'il voudrait manger la même chose qu'elle. (なぜなら、できれば彼女と同じものが食べたいから) などが考えられる。

方法として次に挙げられている項目は、「機能、文法、語彙の探知」と呼ばれるものである。この項目の目的は、表現のトレーニングであり、新しい語の説明である。ここで重要なことは、教師が、授業の必要に応じて重要と思われるものを取捨選択したり、役に立つものをもう一度使ったりすることができることである。しかし、文法の授業ではないのだから、挙げられている説明を網羅的に活用することはそれほど重要ではなく、むしろそうすることで、聴解という基本目的を損なったり、生徒が映画教材に対する興味を失ったりすることのほうが危惧されるという。冒頭のスキプットの、« A vous de choisir »について、教科書は、inciter à faire quelque chose. (何かをする気にさせる) 表現であることを説明し、même sens que l'impératif : choisissez (命令法：選びなさいと同じ意味) とその機能を分類していて興味深い。

以上、見てきたように、著者が主張する聴解能力の涵養は、理解に基づいた聴き取りと口頭表現から構成され、議論などによって支えられている。しかし、エリック・ロメールの映画作品がこうした聴解能力向上の教材として役立つのは何故か。ロメールの作品のもつ特質と関係がありはしないか。こうした角度から新たに教材の対話を検討してみたい

★

ロメール監督の映画作品は要約が困難である。何故なら、それは小説でいうところの描写がかなりの部分を占めているからである。物語の語り手によるナレーションがないので、映像や登場人物たちのセリフから得たさまざまな情報をもとに、われわれ観客の一人ひとりが、物語を紡ぎだしたり、真実を把握したりすることを任せられているといってもよい。ロメール監督自身は、「見せ

る」と「語る」という対立概念による説明をおこなっている。彼の映像は、何かを語っているのではなく、見せているだけだというのだ。映画『美しい結婚』の冒頭から問題の場面までの物語は、はじめドキュメンタリーフィルムのような場面が続く。次いで描写の映像と登場人物たちの会話の連続である。ナレーションや音楽は一切ない。しかし、日記形式の叙述がつづく他の作品に比べると、演劇的な作品である。だが、その要約は、人によって大きく異なる。

アラン・エルテーによる要約によれば――、

(1) サビーヌは美術史の学生である。学費とパリのアパート代を自分で払うために、彼女はル・マンの骨董品店で働いている。そこからさほど遠くないパロンには、母と妹が暮らしているので、彼女は定期的にその家に帰っている。父親は亡くなっている。シモンは、彼女の愛人であり、高名な画家で妻子がある。ある晩、サビーヌとシモンが戯れていると、シモンの妻からの電話で邪魔され、サビーヌはシモンと別れる決心をする。彼女は猛々しく彼に結婚するつもりであることを告げる。困惑したシモンが、サビーヌに誰と結婚するのか訊くと、まだ相手がだれなのかはわからないが、玉の輿に乗るような結婚をするつもりと答えた。

(2) クラリスは、サビーヌの親友。彼女もル・マンで働いていて、ランプ・シェードに芸術的な絵を描いている。まずはじめ彼女のところに、サビーヌは新たな決意を告げに行く。サビーヌは、パリと田舎をいつも移動するのにうんざりした、医者と結婚しているあなたが羨ましいという。だから、自分はこのつましい環境を去り、誰か野心のある人と出会わなければならない。クラリスは面白がって、弟のニコラの結婚式に彼女を招待する。その式の後の披露宴で、クラリスは仲介者を気どり、サビーヌを独身の優秀な弁護士、従兄のエドモンに紹介する。二人は知り合いになるが、エドモンは事務所からの電話で慌ただしく帰って行った。

(3) クラリスに背を押されて、サビーヌは、掘り出し物を口実に、エドモンと連絡を取り、会う約束をする。そして取引はサビーヌによって堂々と成立した。それから二人は、とあるレストランに行く。二人の距離は近づく⁶⁾。

アラン・エルテーの要約は、女主人公サビーヌの内面に踏みこんで、彼女の視点から物語の出来事の継起を記述している。それに対して、次のジョエル・マニーの要約は、物語の筋の展開を担っている出来事に焦点を合わせ、その因果関係を簡潔に説明している。とくにエルテーの要約の(2)と(3)の繋がりが、具体的に詳述されている。

ジョエル・マニーの要約――、

インドのポンディシェリから引き揚げてきた庶民の出である、サビーヌは、ル・マン近くのパロンで暮らし、パ

りのミシュレ学院で美術史の勉強をしている。⁶⁾ 彼女には既婚の画家でシモンという愛人がいる。ある晩、彼は妻子からの電話を受ける。すると、サビヌスは突然、彼から離れ、彼に結婚の意向を告げる。一体だれと結婚するのか、彼女にもまだわからない。ル・マンで彼女は骨董店で働き、生計を立てている。彼女の親友のクラリスは、ランプ・シェードに絵を描いている。片やサビヌスは衝動的だが、原則を立てる。片やクラリスは、愛に導かれるままになる。弟の結婚披露宴の最中に、クラリスはサビヌスにパリに住む独身弁護士、従兄のエドモンを紹介する。彼は母親へのプレゼントにするつもりで、ジャージー島の陶器を探していた。サビヌスはその陶器をもっている伯爵夫人を知っていたが、骨董店の女主人もそれを手に入れたがっていた。サビヌスは、エドモンはタイプじゃないとは言ったものの、彼の魅力に無関心ではいられなかった。日曜日に、サビヌスはエドモンを伯爵夫人の屋敷に連れてゆく。彼女の駆け引きのおかげでエドモンは望みのものを手に入れ、お礼に彼女をレストランに招待する。⁷⁾

映画を冒頭から観れば、二人の関係を指摘することは比較的容易に思われる。女子学生サビヌスは骨董店で売り子としてアルバイトをしている。そして、彼女の仲介でエドモン弁護士は伯爵夫人から品物を購入できたのだから、二人の関係は店員と客の関係と言ってもよいかもしれない。ところが、伯爵夫人の屋敷を後にする時、サビヌスはエドモンに金銭を受けとらない旨を表明した。だから、彼女は商売のために仲介の労をとったわけではないことがわかる。このことは、レストランの対話の中で触れられている。(サビヌス「私は決して良い売り子にはならないわ。人が何か買おうとしていると、買う気をなくさせようとするの。」エドモン「私に対しては、そうはしませんでしたよ。」サビヌス「だって、商売じゃなかったんですから。(…)」)。したがって、もし二人が商売上の関係であれば、フランス語で、*Ils ont des rapports d'affaires.* という表現を用いることができる。しかし、じっさいは、そうではない。

それでは、クラリスにパーティーで紹介された以上、そこで二人は知り合いになり、友好関係をもっているとは考えられないか。すなわち、*Ils ont des rapports d'amitié.* ではないか。ところが、じっさいには、二人はパーティーで少し口をきいただけで、しかも、弁護士はサビヌスとの話の途中で緊急な用事のため中座し、そのまま彼女に挨拶もせずに立ち去っている。また、この対話全体を通じてわかるように、二人は互いのことを十分知っているとは言いがたい (*Ils ne se connaissent pas suffisamment.*)。例えば、エドモンとクラリスは従兄妹同士だが、互いに親しいわけではないことが、二度も彼の口から明かされるし、それに、彼は、サビヌスの出身や家族のことも、この日初めて知ったのである。(エド

モン「いいですか。クラリスは僕の従兄妹だけど、ほとんど会うことはないんですよ。あなたは、こちらのご出身ですか?」サビヌス「いいえ、両親は、インドのボンディシェリーからの引揚者で、父は軍人でしたが、数年前に亡くなりました。母はバロンに落ち着きました。都会に住みたくなかったものですから。農業信用金庫に職が見つかりました。妹は高校2年生です。)」

しかも、すでに述べたように、お互いの間に距離を置いて、vousで呼び合っているのも、そこに *amitié* が成立しているとは断言し難い。それはまだ、*amitié* 未満の、*sympathie* にすぎないのではないか (*Ils ont des rapports de sympathie.*)。また、作品の要約からわかるように、二人の恋愛感情にも言及する必要があるかもしれない。しかし、サビヌスがどんなに熱烈に彼に恋しているように (?), 二人の関係は、客観的には、恋人同士とはいえないのである。

以上のように、グローバル・アプローチの設問 1. の解答を縦糸にして見てくると、二人の映画批評家によっておこなわれた要約が、登場人物のセリフを出所として組み立てられていること、そして、実際に物語の中で起こった出来事について、登場人物の当事者たちがそれを話題にし、さらに解説を加えていることなどが、横糸として証拠立てられる。この作品では、登場人物たちが実に饒舌で、互いに自分の考えを何度もさまざまな形で語り直すので、観客は、同じ主題の変奏と発展をくりかえし耳にすることになり、そのことが学習者の言語習得に多いに役立つのではないと思われる。

ここで、急いで付け加えておかなければならないが、この設問に答えるためには、フランス語の会話や読解に強い上級者にとっては、レストランの場面の視聴、教科書の設問と資料だけで十分かもしれないが、初心者には、映画の冒頭 (あるいは少なくとも、先立つ幾つかの場面) から問題の場面までを視聴させることも必要であるように思われる。この教材を用いた授業の受講者は、このレストランの場面に先立つ三つの場面——アラン・エルデルの要約 (3) に相当する場面も視聴したため、むしろそれらの場面に基づいて解答をおこなったように思われた。受講者は大部分がフランス語歴 1 年 2 カ月であった。もしフランス語の本文とそれに対応するフィルムの視聴だけで解答していたとしたら、解答により多くの時間を要したことだろう。



残りのグローバル・アプローチの設問を利用して、対話の読みを試みる。

対話の流れ：サビヌスの料理の注文の途中、エドモンの言葉が契機となって、人の話に先ず賛成するか、それとも反対するかという議論になり、それはさらに職業の

話題に移行する。エドモンの弁護士という仕事についての彼独自の見解から、サビーヌの商売に関する否定的言辞を経て、創造をめぐる芸術論に至る。芸術家であるクラリスの仕事を可能にしている彼女とその夫の結婚生活の形態をサビーヌは礼賛する。

設問2. Ils parlent de la vie en général. Avez-vous compris de quoi ils parlent ? Quels thèmes ils abordent ? (二人は人生全般について語っています。何について語っているかわかりましたか？ どんなテーマをとりあげているのでしょうか。)

解答：仕事あるいは職業と結婚。

設問3. Ils parlent d'autres personnes : pouvez-vous citer quelques personnes ? (二人は、他の人たちを話題にしています。何人か挙げてもらえますか？)

解答：クラリス、その夫、サビーヌの母と妹。

Sabine : Prenons... Vous aimez les brochettes ?

(サビーヌ「注文しましょう。プロシエツトは好きですか？」)

Edmond : Oui, très bien, oui.

(エドモン「ええ、結構。」)

Sabine : Vous buvez du vin ?

(サビーヌ「ワインは飲みますか？」)

Edmond : Dans les grandes occasions.

(エドモン「特別な場合には」)

Sabine : Disons que c'en est une. Rouge ou blanc ?

(サビーヌ「はっきり言って、特別な場合ね。赤、白？」)

Edmond : Rouge.

(エドモン「赤」)

Sabine : Moi aussi.

(サビーヌ「私も」)

Edmond : Vraiment ?

(エドモン「本当に？」)

Sabine : Vraiment. Je n'approuve jamais par politesse. J'ai plutôt l'esprit de contradiction.

(サビーヌ「本当よ。おつきあいで、同意することはないわ。私はどちらかというと、天邪鬼^{あまのじゃく}なの」)

Edmond : Moi, j'avoue, mon premier mouvement serait d'approuver. Déformation professionnelle.

(エドモン「僕は、白状すると、僕の最初の反応は同意することなんです。職業病です。」)

Sabine : Vous voulez dire que vous vous sentez capable de soutenir n'importe quoi ?

(サビーヌ「それは、自分がどんなことでも弁護できると言うという意味ですか？」)

Edmond : Pas n'importe quoi, mais défendre n'importe qui. Quand quelqu'un vient me trouver, il bénéficie de ma part d'un préjugé favorable. Sinon, il ne se confierait pas à moi.

(エドモン「どんなことでも弁護できる、ではなくて、誰でも弁護できるということです。私に会いに来た人が、私から前もって好感を持たれているということです。そうでなければ、その人は私に何もかも打ち明けはしませんよ」)

Sabine : Ah, je vois. Vous m'approuverez pour me faire parler.

(サビーヌ「ああ、なるほど。私にしゃべらせようと思って、私の言うことに賛成しているんでしょう」)

Edmond : Oh vous jugez en termes de romans policiers !

(エドモン「それでは、推理小説ですよ」)

Sabine : Non, je plaisante. Mais, si vous êtes un bon avocat, moi, je ne serai jamais une bonne vendeuse. Quand les gens essaient d'acheter quelque chose, j'essaie de les en dégouter.

(サビーヌ「いえ、冗談です。でも、あなたが良い弁護士だとしたら、私は良い売り子ではないでしょう。人が何かを買おうとしているときに、私は買う気をなくさせようとするんですから」)

Edmond : Vous ne l'avez pas fait avec moi.

(エドモン「私にはそうしませんでしたね」)

Sabine : Parce que ce n'était pas du commerce. J'ai une horreur malade de tout ce qui est commerce. Je ne sais pas ce que je vais faire dans la vie, mais si je fais quelque chose, ce sera, le mot est un peu prétentieux, tant pis, ce sera pour « créer », pas pour troquer, échanger, faire circuler. Créer. Ne serait-ce que créer un enfant. Un jour ou l'autre, j'aurai un enfant. Si je fais quelque chose, ce ne sera pas uniquement pour gagner de l'argent. Si l'argent vient après, tant mieux. Tandis que l'argent est la seule raison d'être du commerce. On ne vend pas par plaisir, mais uniquement pour gagner. Moi, il faut que je trouve du plaisir à faire ce que je fais.

(サビーヌ「だって、商売じゃありませんでしたから。私は商売に関することはみんな大嫌いです。どんな職業につくか分かりませんが、とにかくするとして、言葉はちょっと気障^{きざ}ですが、仕方ありません。『創造』のためです。物を交換したり、流通させたりするためじゃありません。創造すること。それがたとえ、子供を作ることであっても、です。いつか私は、子供を産むつもりです。たとえなにかするとしても、ただお金を儲けるためじゃありません。もしお金が後からついてくれば、しめたものです。それに対して、お金は商売の唯一の存在理由です。商売は、楽しみで物を売ったりはしません。そうではなくて、もっぱら儲けるためです。私は仕事することに喜びを見いださなければいけないんです。」)

Edmond : Parce que vous avez un tempérament

d'artiste.

(エドモン「それはあなたが芸術家気質をお持ちだからですよ」)

Sabine : Oui, peut-être : un tempérament. Mais je ne suis pas vraiment une artiste. Je ne saurais pas peindre comme Clarisse. Je serais plutôt une bricoleuse. J'aime réparer des ramps, faire des objets. J'aime les meubles anciens. Enfin, j'ai plein d'idées. Peut-être que je rêve.

(サビーヌ「ええ、たぶん。気質。でも、私、本当は芸術家じゃありません。クラリスみたいに絵を描けないし。むしろ工作好きです。ランプを修繕したり、オブジェを作ったり、古い家具が好きです。まあ、アイデアはいっぱいあるの。たぶん、私は夢を見ているんです。」)

Edmond : Oh non, c'est un rêve très modeste.

(エドモン「いやそんなことはありません。それはとてもつつましい夢です」)

Sabine : Trop modeste ?

(サビーヌ「つつまし過ぎる?」)

Edmond : Ah non! Je pense qu'on peut être aussi artiste en faisant du bon bricolage qu'en faisant de la mauvaise peinture. Vous riez ? J'espère que vous ne croyez pas que je pense à Clarisse. J'aime beaucoup ce qu'elle fait.

(エドモン「いえ、そうじゃなくて、私の考えでは、良いブリコラージュすることによっても、下手な絵を描くことによっても、芸術家になれるということです。笑っていますね。私がクラリスのことを考えているなんて思っていないでしょうね。僕は彼女の仕事は好きですよ」)

Sabine : Moi aussi. C'est extraordinaire ce que j'ai pu dire « moi aussi » aujourd'hui.

Non non, je pense à un ami, un peintre, pas « mauvais » d'ailleurs, loin de là... j'ai vécu avec lui, je ne pourrais pas vivre avec un artiste, c'est étouffant. Non, je crois, je crois que... j'aimerais mieux être dans la même situation que Clarisse, avec un mari très pris par son travail. C'est un couple très bien, pas bêtement moderne. Vous ne trouvez pas ?

(サビーヌ「私もよ。信じられない。今日はどれだけ、『私も』って言ったのかしら。いえ、私が考えているのは友達の、ある画家のこと。それに『下手』じゃない。それどころか...彼と暮らしていたことがあるの。私は芸術家とは暮らせない。息が詰まるわ。いや、たぶん、私はクラリスと同じ境遇でありたいと思っているの。仕事でとても忙しい夫がいるような。とても素晴らしい夫婦、ありきたりのモダンな夫婦じゃないわ。そう思いませんか?」)

Edmond : Si. Ils sont très sympathiques. Vous savez,

Clarisse est ma cousine, mais nous nous voyons si peu ! Vous n'êtes pas d'ici ?

(エドモン「そう。あの夫婦はとても感じがいい。いいですか。クラリスは僕の従兄妹ですが、ほとんど顔を合わせることはないんです。あなたはこちらのご出身ですか?」)

Sabine : Non, mes parents sont des rapatriés de Pondichéry. Mon père, qui était dans l'armée, est mort il y a quelques années. Ma mère s'est installée à Ballon, parce qu'elle ne voulait pas vivre en ville. Elle a trouvé une place au Crédit Agricole. Ma soeur est en première au lycée.

(サビーヌ「いいえ、両親は、インドのポンディシェリーからの引揚者で、父は軍人でしたが、数年前に亡くなりました。母はバロンに落ち着きました。都会に住みたくなかったものですから。農業信用金庫に職が見つかりました。妹は高校2年生です。」)

語学スキルから内容理解へ

問題4. Est-ce que Edmond a l'esprit de contradiction ? (エドモンは天邪鬼ですか?) は、内容理解を問う設問である。esprit de contradictionは、直訳すると、反論の精神。普通、「あまのじゃく」、「へそ曲がり」と訳されている。サビーヌは自分を評して天邪鬼という。教科書は、J'ai plutôt l'esprit de contradiction.というサビーヌのセリフを、Je m'oppose à quelqu'un par principe. (必ず私は人に反対する)と説明している。「わざと人に逆らう言動をする人。つむじまがり。ひねくれ者」(「大辞泉」)という日本語の天邪鬼の説明にほぼ一致している。解答として、Non, il n'a pas l'esprit de contradiction. (彼は天邪鬼ではありません)とオウム返しに答えることは、語学スキルとしては正解だろう。ただ、内容に踏みこんでみると、エドモンは天邪鬼どころかその逆で、彼は弁護士という職業柄、まず相手の意見に賛成すると告白している。それによって、クライアントは好感をもたれていると思い、彼に何でも打ち明けるといのである。サビーヌとの対話の間、彼は聞き役に回り、自分のことをあまり語らなかったが、唯一自分について多く語ったのが、このくだりである。他者に対して受容的態度をとることが、とくに弁護士という職業に固有の傾向とも思われないうが、彼がそれを職業病として強調するところに、彼の個人的性格が表れているように思われる。

問題5. Quelle explication donne Edmond de son attitude ? (どんな説明をエドモンは自分の態度についておこなっていますか?) は、解答として、Il explique son attitude comme une déformation professionnelle. (彼は自分の態度を職業病と説明しています。) が考えられるだろう。

問題6. Quelles phrases vous permettent de faire une

hypothèse sur sa profession ? (どの文章のおかげでエドモンの職業について推測をすることができますか?) という設問は、セットになっている次の問いがヒントとなる。Quel mot vous donne la clé ? (どの単語が手がかりをくれますか?) もっとも、これは解答としては除外しなければならないが、サビーヌが先でエドモンの職業をそのまま口にしているセリフがある。(Non, je plaisante. Mais, si vous êtes un bon avocat, (...)「いえ、冗談です。でも、あなたが良い弁護士だとしたら、(...)」)。

したがって、キーワードは、défendre である。défendre son client (弁護士が依頼人の弁護をする) (「ロワイヤル仏和中辞典」) は初心者 の 必 須 単 語 の 用 例。教科書は、soutenir の同義語として、affirmer quelque chose, défendre une idée をあげている。

そういうわけで、エドモンの職業が弁護士であるという推測が成り立つのは、次のふたつの文章からである。1) Sabine : Vous voulez dire que vous vous sentez capable de soutenir n'importe quoi ? (サビーヌ「それは、自分がどんなことでも弁護できると思うという意味ですか?」) 2) Edmond : Pas n'importe quoi, mais défendre n'importe qui. (エドモン「どんなことでも弁護できる、ということではなくて、誰でも弁護できるということです」)。

エドモンの次のセリフ、« il bénéficie d'un préjugé favorable. » の和訳は厄介である。従属節Quand quelqu'un vient me trouver, (誰かが私に会いに来た時) がその前に置かれているが、この会いに来た誰かを主節の主語 (il) は受けている。具体的には、依頼人 (client) であると考えてよい。教科書は、préjugéの説明として、une idée préconçue (先入観) とだけ記しているが、十分とはいえないだろう。件の語は、Dictionnaire du français au collègeによれば、opinion préconçue, jugement favorable ou défavorable porté d'avance (souvent péjoratif)。したがって、préjugéは、偏見、先入観という負の価値だけでなく、préjugé favorable「前もってもたらされた好意的な考え・判断」というプラスの価値も持っている。「ロワイヤル仏和中辞典」は、bénéficier d'un préjugé favorable「前もって好感を持たれる、ひいきにされる」を用例としてあげ、それを偏見・先入観の項目とは別に立てた予断・臆断の項目に分類している。したがって、訳文は、「私に会いに来た人 (依頼人) は、私から前もって好感を持たれているのです。」

さらに、préjugéは、法律用語では、判例・前例を意味し、bénéficier d'un préjugé favorableという同じ表現が、「有利な判例の恩恵に浴する」(「白水社仏和大辞典」) という意味を持っていることは、興味深い。いかにも弁護士のエドモンに似つかわしい表現だが、このダブルミーニングのセリフは、作品全篇の中で、なんらかの比喩的意味を帯びることになるのだろうか。

ところで、このレストランでの対話の場面は、物語の展開の上で蝶番^{ちょうがひ}をなす重要な場面であるといっていよい。この場面の特徴は、そこで話されているセリフだけでなく、むしろロメールが「見せている」映像にある。とくに対話者と交互に映し出される穏やかな弁護士の顔に浮かぶ謎めいた表情は、彼との結婚をもくろんで接近した対話者、サビーヌの目にはどのように映ったのだろうか。サビーヌの話題につれて微妙に移り変わってゆく彼の表情。われわれ観客は、少なくともサビーヌよりも冷静に、その表情の意味を読みとることができるように思われる。もっとも、自身についてはあまり語ることもないこの弁護士の本心を突き止める決定的な瞬間に立ち会うためには、われわれは恋するサビーヌとともに彼を最後まで追い続けなければならない。



本文の理解を確認する問題は以下の通りである。

問題7. Que dit Sabine de son métier ?

(サビーヌは自分の仕事について何と言っていますか?)

解答：質問の構文をそのまま用いれば、Elle dit de son métier qu' il ne lui plaît pas du tout.

(彼女は、自分の仕事について、それが全然好きではないと言っている。)

：具体的に骨董品店の売り子の仕事について言えば、Elle dit qu' elle ne sera jamais une bonne vendeuse, parce qu' elle essaie de déguster les gens d'acheter quelque chose.

(自分は、何かを買おうとしている人の気持ちをなくそうとするから、自分は良い売り子ではないだろうと彼女は言っている。)

問題8. Que voudrait-elle faire dans la vie ?

(彼女はどんな仕事をしたいと思っていますか?)

解答：Elle voudrait être artiste.

(できれば芸術家になりたいと思っている。)

問題9. Qu'est-ce qu'elle déteste le plus : l'argent ou le commerce ?

(彼女が一番嫌いなことは何ですか？ お金それとも商売?)

解答：C' est le commerce. (商売です。)

問題10. Pour elle, qu'est-ce qui est important dans le travail ?

(彼女にとって、仕事で重要なのは何ですか?)

解答：Pour elle, c'est important de créer dans le travail. Il faut qu' elle trouve du plaisir à faire ce qu' elle fait.

(彼女にとって、仕事で大切なことは、創造することである。仕事をすることに喜びを見いださなければならない。)

問題11. Elle parle de Clarisse ? Quelle est la profession de Clarisse ?

(彼女はクラリスの話をしていますか？ クラリスの職業は何ですか？)

解答 : Oui, elle parle de Clarisse. (Oui, elle en parle.) Elle est artiste.

(はい、彼女はクラリスの話をします。彼女は芸術家です。)

問題12. Quelle différence principale trouve-t-elle entre Clarisse et elle ?

(彼女はクラリスと自分の主な違いは何だと思っていますか？)

Relevez les deux mots qui expriment cette différence.

(この違いを表す単語をふたつ挙げなさい。)

解答 : La différence principale qu' elle trouve entre elles, c'est que Clarisse est une artiste, tandis qu' elle ne l'est pas.

(彼女が見いだしている二人の違いは、クラリスは芸術家であるが、それに対して、彼女は芸術家ではないということです。)

Ce sont les mots artiste et bricoleuse.

(それは、芸術家と工作好きの人という単語です。)

問題13. Edmond n'est pas tout à fait d'accord. Que lui répond-il ?

(エドモンは全く同意している訳ではありません。彼はサビーヌに何と答えましたか？)

解答 : Il répond qu' à son avis, on peut être aussi artiste en faisant du bon bricolage qu'en faisant de la mauvaise peinture.

(彼の答えは、彼の意見によれば、下手な絵を描くことによってと同じくらい良いブリコラージュをすることによっても、芸術家になれる。)

問題14. Sabine a-t-elle envie de vivre avec un artiste ?

(サビーヌは芸術家と暮らしたいと思っていますか？)

解答 : Non, elle n' a aucune envie de vivre avec un artiste, parce que c' est étouffant.

(いいえ、彼女は芸術家とはまったく暮らしたいとは思っていません。自由がなくて息が詰まるからです。)

問題15. Quel compliment fait-elle sur Clarisse et son mari ?

(彼女はクラリスとその夫に対してどんな言葉で褒めていますか？)

解答 : C' est un couple très bien, pas bêtement moderne.

(あの二人はとても良いカップルで、ありきたりのモダンなカップルではありません。)

問題16. Que dit-elle à Edmond sur sa famille ?

(彼女はエドモンに自分の家族についてどう言っていますか？)

解答 : Elle dit que ses parents sont des rapatriés de Pondichéry et que son père, qui était dans l'armée, est

mort il y a quelques années. Sa mère s'est installée à Ballon, parce qu'elle ne voulait pas vivre en ville. Elle a trouvé une place au Crédit Agricole. Sa soeur est en première au lycée. (対話の訳文を参照のこと)

問題17. Dans quelle partie de la France vivent-ils ?

(彼らはフランスのどんな部分に暮らしていますか？)

解答 : Ils vivent en province.

(彼らは地方に住んでいます。) 首都のパリに対立する語は、地方 (province)。都会 (ville) に対立する語が、田舎 (campagne) である。

このように、レストランの場面の視聴だけでは、本文の内容理解は、語学スキルの涵養のレベルにとどまらざるを得ないが、少なくともレストランの場面に先立つ幾つかの場面——エドモンとサビーヌとの初めての出会いの場面から視聴すれば、鑑賞のレベルの、内容に踏みこんだ解答が可能になると思われる。もちろん、映画全篇の視聴は、なおいっそう内容理解を深めるだろう。しかしながら、クラスの平均的学習者を想定した場合、作品に対する学習者の興味の有無、教材の増補や改訂の必要性、そして、授業時間の長短などの問題を検討あるいは解決するよう努めない限り、映画全篇の内容理解は、このメソッドでは難しいのではないと思われる。したがって、語学スキルから内容理解への移行は、教師の裁量に委ねられている以上、この教科書の枠内で、むしろそれを叩き台にした使用法の開発がおこなわれるべきだろう。

じっさい、同じ編著者による、『人生の映画 2』(Le Cinéma de la vie 2) には、『美しい結婚』からの抜粋がさらに二章、付け加えられている。⁸⁾ ひとつは、要約 (2) に相当する箇所に対応している、サビーヌとクラリスの対話である。現実に相手がいないまま結婚の決意を固めたサビーヌが、クラリスを訪れ、二人で結婚、仕事、そしてお互いの性格を議論する重要な場面である。教科書には、「ディスカッション」という項目が設けられている。そこでは、サビーヌとクラリスは、人間の二つのタイプを代表し、一方は理性を、もう一方は心情を表しているという考えに基づいた上で、クラスを、サビーヌ派とクラリス派の二つのグループに分け、それぞれの女性の人生に対する態度を擁護する議論をおこなうよう指示がなされている。いまひとつの章は、サビーヌとその母との対話である。そこでは、とくにサビーヌの結婚観が具体的に語られている。練習問題は、対話の内容を整理して理解できるように工夫されている。以上の二つの章は、内容理解には不可欠である。

同様に、もうひとつ内容理解を深める方法がある。それは、ロメール監督の他の作品との比較によって、問題の対話を解明することである。ところで、『美しい結婚』からの抜粋「レストランでの対話」が収められている『人

生の映画1』は、全12章から成るが、各章を構成しているロメール監督の作品タイトルを挙げてゆくと、1、2章、『緑の光線』、3、4章、『海辺のポリヌ』、5章『春のコント』、6章『モード家の一夜』、7章『美しい結婚』、8章から12章までが、『木と市長と文化会館』である。ところが、われわれには6章と7章の二つの作品の連続は偶然とは感じられない。なぜなら、6章の『モード家の一夜』も7章と同様（男女のちがいはあるが）、結婚を決意した男がその実現に向けて行動を起こす作品だからである。編著者はこの点において、両作品の比較が授業の際におこなわれることを念頭においていたのではないだろうか。

★

『獅子座』（1959）にはじまるロメール監督の長編作品の制作は、60年代から70年代にかけては、「六つの教訓話」の連作と、ふたつの文学作品の映画化につきる。80年代は、「喜劇と格言」シリーズと、他2篇である。『モード家の一夜』（1969）は、『シコントモロー』シリーズの三作目に当たる。それらの教訓話は、男性の語り手たちがいずれも、決まった女性がいるにもかかわらず、思いがけない状況の中で、別の女性に興味をいだき、倫理からわき道に逸れそうになるところを辛うじて免れるという同一の構造とテーマをもっている。80年代の「喜劇と格言」シリーズは、ロメール自身によれば、説話（conte）が喜劇（comédie）に対置され、倫理＝教訓（moral）が格言（proverbe）に対置されているとのことで、教訓話の主人公たちのモラルは、伝統的なタイプのモラルであり、そして、そのモラルがひとりの女性の登場人物によって問い直されているという。「喜劇と格言」シリーズにいたっては、「今やモラルはありません。それは、諺のような、故意に面白みのない寓話の調子になるでしょう」⁹⁾と、監督は『シネマトグラフ誌67号』（1984年5月）のインタビューで述べている。果たして、旧モラルの崩壊後の行為の基準は何だろうか。

『美しい結婚』（1982）は、シリーズ二作目。ほぼ同時期に、三作目の『海辺のポリヌ』（1983）が完成。上のインタビューでの監督の発言がおこなわれたのは、四作目の『満月の夜』（1984）の封切り上映の時期に当たる。シリーズは（そして、ロメール作品に対する評価も）頂点に登りつめる寸前であった。「喜劇」の主役は80年代の女性たちである。サビヌ、クラリス、ポリヌ、マリオン、ルイズ……。シリーズ第一作目の『飛行士の妻』（1981）だけは主人公が男性であるために、「教訓話」から「喜劇」への過渡的な作品のような印象を与えるが、そうではなく、じっさい、すぐに泣くアンヌ役のマリー・リヴィエールの圧倒的な存在感が一作目の全篇

を支配している（彼女は、シリーズ五作目『緑の光線』（1986）で主人公デルフィーヌを演じ、成功をおさめている）。それに、この時、新シリーズのコンセプトについては監督によって明確な説明がすでにおこなわれていた。

「六つの教訓話」の登場人物たちが自分の物語を体験することと同じくらい、語ることに余念がなかったのに対し、「喜劇と格言」の登場人物たちは、むしろ自分自身を演出することに関心をもつことになるだろう。「教訓話」シリーズでは、登場人物たちが自分を小説の登場人物と思い込んでいた。「喜劇と格言」シリーズでは、登場人物たちは自分を引きたてる状況に置かれると、その役の性格になりきってしまうことだろう。こうした状況は、「六つの教訓話」の状況とは逆で、もはや共通したテーマからは生まれないだろう。そして、シリーズに含まれる作品数は6つに限定されることはなく、おそらくもっと多いか、まだ不確定ということになるだろう。仮にテーマの統一ということがあるとするならば、それは前以て与えられるものではなく、作品がつぎつぎと生まれる中で、観客と作者、そしておそらく登場人物自身によって発見されることになるだろう。

この「喜劇と格言」では、登場人物たちは極めて饒舌であるが、それは自己分析や動機の吟味のためというより、ある出来事が本当に起こったのか、あるいは起こり得るのかをよく考えるためだろう。道徳的な態度の確立よりも実際的なルールを定めることに努め、目的ではなく、手段について話し合うことになるだろう。¹⁰⁾

この所説に照らし、同じ結婚のテーマをもつ『モード家の一夜』を補助線にして、『美しい結婚』の件の場合を解明できないだろうか。映画『モード家の一夜』には、あたかも小説の一節を朗読するような男性のナレーションの声が聞こえてくる重要な場面がある。語り手は主人公の「私」、ジャン・ルイである。クリスマスの電飾が美しい夜の街をすべるようにすすむ車。運転しているジャン・ルイに突然、閃く啓示：「Ce jour, lundi 21 décembre, l'idée m'est venue, brusque, précise, définitive, que Françoise serait ma femme.」（「その日、12月21日月曜日、突然、はっきりと、決定的に、フランソワーズは私の妻になるだろう、という考えが浮かんだ。」¹¹⁾）この章句に対応するのは、『美しい結婚』では、サビヌの次の断言：「de gré ou de force, il sera mon mari.」（「いやでも応でも、彼は私の夫になるわ」¹²⁾）だろう。このセリフは、彼女と弁護士エドモンの初めてのデートともいえる例の「レストランでの対話」の後、

エドモンから何の音沙汰もないので、親友のクラリスに相談に行き、この相談相手に励まされたサビーヌが、これからは受け身ではなく、自分のほうから積極的にエドモンとの結婚へ向けて行動することを決意して発した言葉である。

要約を思い出してほしい。そもそも、サビーヌは、まだ相手も決まっていないうちから、何度も結婚の宣言をおこなってきた。はじめは愛人の画家シモンに対して。それは、自分の置かれている境遇に対する悔しさから、衝動的に彼女が画家との関係を清算することを決めたからだ。そこには、たしかに、教訓話の主人公たちの伝統的なタイプのモラルは、もはや存在しない。だから、「道徳的で、カトリック」、「偽善的で、利己的でもない誠実な娘」¹³⁾と、愛人の妻のモードにさえ評価された『モード家の一夜』の女子学生、フランソワーズのように、信仰に背いてまでも、妻子のある愛人を夢中で愛したがゆえに、別離後も相手をすぐには忘れられず苦しむというようなことも、サビーヌにはないのである。次いで親友クラリスに対しては、サビーヌはこう宣言した。

Sabine : Je vais me marier. (...)

(サビーヌ「私、結婚するわ」)

Clarisse : Alors avec qui ? Je le connais ?

(クラリス「それで、誰と？ 私の知ってる人？」)

Sabine : Avec personne. Je dis ça en général.

(サビーヌ「いないの。一般的に言ってるの」¹⁴⁾)

サビーヌが結婚の宣言をおこなったのは、特定の相手がいるわけではないが、玉の輿に乗るような結婚をすることによって、現在自分を圍繞している「凡庸な」環境からクラリスが属しているような別の環境に移る決心をしたことを親友に聞いてもらうためだった。このことを、当時の映画批評は次のように説明している。「登場人物たちの振る舞いが、もはや倫理的な基準によってではなく、社会的な価値観によって導かれている世界、神なき世界が描かれている」(アラン・カルボニエ「自由の幻想」¹⁵⁾)、と。そして、「サビーヌは、直接的かつ露骨に社会的上昇の階梯を乗り越えたいという欲望を表現している。ここで問題になっていることは、もはやモラルを試練にかけることなく、ある計画を見事に達成することである。すなわち、金持ちで、そして、どうせなら魅力的な男に結婚してもらうことである」と説明している。しかし、果たして倫理的な基準に取って代わったものが、社会的な価値観のみに限定できるかどうか。サビーヌの言動については、その所説があてはまっても、『美しい結婚』のすべての登場人物が主人公のサビーヌと同じ社会的な価値観をもち、同じ振る舞いをしているとは限らないのである。ロメール監督がシリーズ四作目の発表後に明言した旧モラルの崩壊後それに代わるものとし

て、「諺のような、故意に面白みのない寓話^{フアーブル}の調子」で語られていたのは、もしかすると自由と愛のモラルだったのではないだろうか。もっとも、二作目から四作目までは、いずれのヒロインもその成就には至らなかったのだけれども、記された格言は監督からヒロインに宛てた優しい忠告のようにも読める。ちなみに『美しい結婚』の格言は、Quel esprit ne bat la campagne ? Qui ne fait châteaux en Espagne ? である。「取り留めもない空想にふけったり、支離滅裂なことを言ったりしない人がいるだろうか？ 空中樓閣を築くような実現不可能なことを計画しない人がいるだろうか？」である。『ラ・フォンテーヌ寓話集』(7巻の第9話「乳しぼりの女と牛乳壺」¹⁶⁾)からの引用である。牛乳壺を頭にのせ、町に売りにいく途中で、乳しぼりの女が「はやくも頭の中で、牛乳代の総額を計算し」、それで買った卵とメンドリで雛を育て、さらにその代金でブタや牛を飼う空想をして興奮し、まだいない動物といっしょにとび跳ねたため、牛乳壺を落として、「すべてをフィにってしまう」という寓話である。この話のあとに引用文と、さらに「ピクロコル、ピルス、乳しぼりの女、要するにだれでも、賢い人でも、愚かな者でも、ひとはみんな目をあけながら夢みているが、これほど楽しいことはない」が続き、最後は「なにかのはずみでわれに返ってみれば、わたしはもとの木阿弥^{もくあみ}」で終わる。寓話の「乳しぼりの女」がサビーヌの似姿であるとすれば(それは、われわれの似姿でもあるのだが)、サビーヌがクラリスに語っている次の言葉は、漠然とではあるが理解できる。「私は衝動的だからこそ、原則が必要なの。私は自分のしたいことは一般的に決めるの。でも、個別的なことについては、自分の気まぐれに従うわ」¹⁷⁾。ところが、「社会的な価値観」に基づいた原則をもち、「気まぐれに従う」サビーヌとは対照的に、「愛によってのみ導かれること」を原則としている親友クラリスは、サビーヌの結婚宣言の直後に、「そんなふうに抽象的に、結婚を決めたりはしないものよ。私が結婚したのは、フレデリックが好きだったからよ」と、サビーヌをやさしくたしなめている。

かくして、クラリスは弟の結婚披露宴の席で、弁護士のエドモンをサビーヌに紹介する。二人でいるとき、偶然、上着の裾がふれて、テーブルから落下しそうになるシャンパングラスを素早く彼女の手がすくいとった。あなたは反射神経が鋭い、とエドモン。一日じゅう壊れものを扱っていますから、とサビーヌ。エドモンに何をしているのか訊かれて、彼女は、パリ第一大学の美術史の学生で修士論文の準備をしている、そして、ル・マンの旧市街で目下のところ骨董品にかかわっていると話す。話がはずみ、エドモンは彼女に、ジェルゼ島の陶器を探していることを打ち明ける。その話のつづきをするために庭に出たが、彼は電話のために中座する。ところが、話し相手だった彼女を置き去りにしたまま、彼は挨拶も

せず、急用のため慌ただしくパリに引き揚げていった。彼が戻ってくるのを虚しく待ちつづけるサビーヌ。カメラはひとり夕陽を浴びて窓辺にたたずむ彼女が、孤独と不安にみちた顔でこちらを振り返る瞬間を捉えている。

問題の「レストランでの対話」の場面は、この二人の初対面の出会いの後に来る。

それでは何故、サビーヌとエドモンは再び会うことになったのか。それはパーティーから四日後の水曜日に、クラリスがサビーヌの働いている骨董品店を訪れ、エドモンが彼女に一目ぼれしたこと、そして、クラリスのみが知る情報、サビーヌが彼の好みのタイプにぴったり一致することを告げたからである。サビーヌにとって、エドモンは好きなタイプではないが、少しは気に入っていた。しかし、もし彼がサビーヌに好意をもっているのであれば、何故エドモンのほうから彼女に会う手はずを整えることをしないのか、というサビーヌの疑問に、クラリスは即座に答える。仕事面で行動的な男性は、女性面では熱意に欠ける。サビーヌに会うためには、彼はクラリスを仲立ちとして頼む必要がある以上、クラリスからの揶揄を恐れる彼にはそれができない、と。サビーヌが頭の中にいだいている美しい結婚の夢は、弁護士エドモンの冷ややかな振る舞いによって壊され、親友クラリスの巧みな語りによって蘇える。ここでサビーヌはクラリスの演出によって演技する女優であるという演劇性が指摘できる。クラリスが目撃したという、エドモンのサビーヌへの一目ぼれの事実はなかった。そのことは、観客として一部始終を目撃したわれわれが一番よく知っている。しかし、「愛に導かれるままに」生きることを原則とするクラリスの目には、パーティー会場での二人の様子がそのように映ったにちがいない。そうである以上、彼女は嘘をついたわけではなく、彼女が目撃したという一目ぼれの瞬間とは、彼女の事実誤認にすぎなかったといつてよい。したがって、サビーヌはおそらく半信半疑のまま、クラリスの創造した恋物語のヒロイン、恋する女を演じることになったのだろう。

このようにして、クラリスに背を押されたサビーヌは、自分のほうから男性を追うことは決してしないという原則を捨て、クラリスから教えてもらった連絡先に骨董品の件で電話をかける。そして、日曜日に、エドモンが興味をもっているジェルゼの掘り出し物があるル・マンから数キロの場所まで、彼を車で案内するという約束を首尾よくとりつける。ト書きには、「彼女は受話器を置く。顔には抜け目のない笑みがさざまれている」¹⁸⁾とある。かりに通俗小説風の語りで表現すれば、「電話を終えると、してやったり、という表情でにんまりする」と、いうことになるのだろうか。恋する女の素顔である。

当日、11時頃、小型車で伯爵夫人の邸宅へ向かうサビーヌとエドモンの姿があった。エドモンによれば、自分は別に収集家ではなく、母親へのプレゼントのため、と

説明する。広い庭が窓から見える豪邸の居間で、二人は伯爵夫人に迎えられる。サビーヌが、「弁護士のシュロー先生をご紹介します。バシユレ医師の従兄です」というと、伯爵夫人は、「なんとおっしゃいました。シュローですか？ あなたは、ル・マンのシュロー家のご子息？」と尋ね、その後も、その土地の名家と思われるシュロー家と昔から交友関係があったことを熱心にくりかえし語ろうとする。一方、サビーヌは堂々とした態度で、伯爵夫人の言い値よりも安くジェルゼの壺を彼のために手に入れることに成功した。商談の成立の際に、「値段の交渉は私の得意とするところではありません」と、エドモンへの体面上、譲歩する老獪な伯爵夫人に対して、「私も、です」と言い放つサビーヌに、駆け引きの巧みさと、商才の豊かさを感じない人はいないだろう。しかしながら、訪問先を辞し、豪邸の玄関の石段の下で、サビーヌは「私は商人ではありません」と言って、エドモンがいくら申し出ても手数料を受け取ろうとはしない。エドモンにとって、二人の関係はあくまでビジネスの関係だったのである。

再び車に乗ると、エドモンは、とりあえずレストランを探そう、お腹はすいていますか、料理は作りますか、などと次々とサビーヌに話しかける。サビーヌは、料理は得意だし、いくら食べても太らない、などと答え、話は尽きない。こうして、「レストランでの対話」の場面に至ったのであるが、そこではしかし、演技とはいえ自信にあふれ饒舌なサビーヌに対して、しだいにエドモンは口数が少なくなってゆき、最後は沈黙してしまう様子をカメラは捉えている。

「結局のところ、私は語るのではなく、見せるのです。行動し、話をする人々を見せること。それが私のできるすべてです。」¹⁹⁾と、ロメール監督がいうように、われわれ観客は台詞の内容以外に、映像からまだ言語化されていない多くのものを受け取っている。dire（言う、語る）をsignifier（意味する）と言い換えている文章がある。「映像は、意味するようではなく、見せるようにできている。意味するためには優れた道具、話し言葉が存在する」。²⁰⁾ そうすると、映像こそが「行動し、話をする人々を見せる」ことになる。そう考えると、画面の中で語られている登場人物の話の内容と、その場面の映像にズレが生じる場合があることに気付く。『モード家の一夜』で、フランソワーズがためらいながらジャン・ルイに語るセリフは、言葉数は少ないが実に重い、過剰な意味を荷っている。それに対して、サビーヌが口にする結婚宣言は意外と軽く、信じる人がいるとは思えないほどである。また商才があるにもかかわらず、商売への嫌悪を力説するサビーヌがもたらす違和感。これらの印象は言葉だけから得られるのではなく、映像が「見せる」からではないだろうか。

相手の言ったことに対しては、必ず相手を肯定するよ

うな意見を述べて好感をあたえようとしていたエドモンが、ある話題は不問に付した。芸術論の流れの中で、サビースが、画家と同棲していた体験をためらいもなく告げた時だった。エドモンの半身ショットは、誰もいないはずのテーブルの席からカメラが捉えたものであるから、サビースの視線が捉えたエドモンの姿ではない。サビースの話を黙って聞いているエドモン。クラリスのカップルの話題に移ってやっと、口を利く。一方、『モード家の一夜』でも結婚前の不倫が問題になる場面がある。浜辺で、偶然、モードと再会したジャン・ルイが話を終えて、妻のフランソワーズのところへ行くと、彼女が不安と苦悩にみちた表情のまま、黙っているのに気付く。結婚前のフランソワーズの愛人について、彼女はどうしてもその名を明かさなかったが、それは、実は、モードの夫であった。その発覚を恐れていたのだった。1969年に22歳の生物学専攻の学生フランソワーズは、1982年に35歳の弁護士エドモンと同年齢である。二人が同時代のモラルを共有していたとしても不自然ではない。

エドモンのサビースへの興味を示す問いは、唯一つ、「あなたはこちらのご出身じゃありませんか?」という彼女の出自を問うものであった。地元の出身ではなく、フランスの植民地だったインドのボンディシェリーから家族で引き揚げてきたことや、家族の話題に対して、彼はもはやそれ以上何も訊くことはなく、うつむき加減に沈黙を守っていた。

そして同じシークエンスの次の場面、レストランの建物から二人が外に出て水辺で佇む場面は、ひとことのセリフも発せられない短い場面である。それは、二人の心理的な距離を暗黙のうちに示す両義的な映像である。この場面のト書きは、「ラヴァンセヌ・デュ・シネマ 293号」では、次のように記されていた。

「水車小屋のレストラン、遠景：ドアが開く。建物の正面、川の前。サビースが出てくる。続いて、エドモン。二人は川に沿ってすすむ。川沿いの小さな橋の欄干にいる二人。エドモンとサビースの全身ショット。水車小屋レストランの角。カメラ左にパノラミックショット。近接撮影。サビース、背をこちらに向け、欄干に寄りかかる。川の流れを見ている。エドモン、サビースとわれわれの間を通り過ぎ、サビースの傍らで欄干に寄りかかる。左手で、二人は川の流れを眺めている。エドモンがこちらを振り返る。次いでサビースが同じ動作をする。サビース、エドモンの肩に頭をもたせかける。互いに見つめ合い、遠慮がちに微笑む。サビース、左手にすすみ、画面から消える。エドモン、彼女の後を追う。カメラ、左にパノラミックショット。ふたたびフルショット。二人が半ロングショットで遠ざかってゆく。左に水車、サビースとエドモンは遠ざかり、並木道のつきるところで右に曲がる。」²¹⁾

ところが、普及版の「カイエ・デュ・シネマ」編集の

シナリオでは、次の通り。

「レストランから出ると、二人は立ちどまり景色を眺める。サビースはエドモンの肩に頭をもたせかける。二人、互いに微笑む。彼女は彼をまじまじと見つづける。彼女はキスを待っているように思われるが、キスは来ない。」²²⁾

両者の異同は、明らかである。サビースがエドモンの肩に頭をもたせかけ、互いに微笑みあった仕草の後、普及版にのみ付せられた「彼女はキスを待っているように思われる」というト書きが問題である。これは外面の描写ではなく、サビースの内面を明かすコメントである。そうだとすれば、この場面が意味しているのは、エドモンがこうした彼女の期待に答えなかったという事実他にない。しかし、ここで重要なことは、二人が微笑みを交わし合った仕草の後に続いて、じっさいに彼女の彼への凝視があったかどうか、そして、その行為にキスを待つ願望が込められていたかどうかを知ることだろう。じっさい、映像は、ほんの束の間、ただ単に、「互いに見つめ合い、遠慮がちに微笑」みを交わし合っただけのようにも見える。しかし、たとえそうだとした場合、普及版のト書きの書き手が、サビースの願望を読み誤ったわけではないだろう。なぜなら、夫としては満足でも恋人としてエドモンをそれほど気に入っていないサビースは、彼を誘惑するために、恋する女を演じているからだ。だから、あたかもキスを待っているかのように演技をしたといったほうが適切かもしれない。ただ、サビースの真の願望はやはり、彼に自分を愛させること、彼に真に愛されることにある。しかし、今回は、エドモンの「肩に頭をもたせかけ、互いに見つめ合い、遠慮がちに微笑む」だけにとどめていたはずである。²³⁾ところが、『喜劇と格言』シリーズでは、登場人物たちは自分を引きたてる状況に置かれると、その役の性格になりきってしまうことだろう」と、ロメール監督が言っているように、サビースは、自分が演じている役柄、恋する女になりきってしまい、自分の振る舞いが演技なのか真の願望なのか区別がつかなくなり始めているのではないか。結局、二種類の異なったト書きが存在することは、この場面の曖昧さのみならず、弁護士と女子学生の関係の曖昧さをも証拠立てているといえるだろう。

この「レストランでの対話」の後、エドモンからサビースへの電話はなかった。彼女は再びクラリスのもとを訪れ、あらためて、「*de gré ou de force, il sera mon mari.*」(「いやでも応でも、彼は私の夫になるわ」)という結婚宣言をクラリスにおこない、エドモンとの結婚へ向けて積極的に活動をはじめた。以上、映画の後半の展開と結末を明かさないように配慮して「レストランでの対話」について述べた。今後さらに映画全篇を教材として提供できるような方法を開発できればと願っている。

(2011年9月)

注

- 1) 日本で語学教材として刊行されたエリック・ロメールの作品は、次の通りである。
『満月の夜』（1989）、『海辺のポリヌ』（1989）、『友達の恋人』（1990）『緑の光線』（1990）、『レネットとミラベル——四つの冒険』（1991）（以上すべて、駿河台出版社刊）
また、イタリアのLazzretti社から刊行された「Vous comprenez le français ?」シリーズには、『美しい結婚』（1995）、『飛行士の妻』（1996）、『海辺のポリヌ』（1996）、『ペルスヴァル・ル・ガロワ 聖杯伝説』（1997）などのロメール作品が含まれている。
- 2) 『AERA Mook14 外国語がわかる。』朝日新聞社、1996. p.13
- 3) Janine Courtillon et Geneviève-Dominique de Salins : *Le Cinéma de la vie* 1, Didier, 1996. 『人生の映画1』（ディディエ社、1996年）pp.2-3
- 4) op. cit. p.29
- 5) 「ある批評家への手紙——『教訓話』シリーズについて」、エリック・ロメール『美の味わい』（梅本洋一・武田潔訳、勁草書房、1998年）所収、p.103 「語る」と「見せる」の議論は、ナラトロロジーの問題にかかわるため、拙稿で論じているほど単純ではない。稿をあらため論じたい。
- 6) Alain HERTAY : *Éric Rohmer Comédies et proverbes*, Édition du CÉFAL, 1998. pp.35-36
- 7) Joël MAGNY : *Eric Rohmer*, Rivages Cinéma, Paris, 1986, pp.170-171.
- 8) Janine Courtillon et Geneviève-Dominique de Salins : *Le Cinéma de la vie* 2, Didier, pp.4-9 ふたつの章は連続している。
- 9) Carole Desbarats : *Pauline à la plage d' Eric*

- Rohmer*, Editions Yellow Now, p.11.
- 10) Joël MAGNY : *Eric Rohmer*, Rivages Cinéma, Paris, 1986, p.167.
 - 11) 映画『モード家の一夜』より引用。
 - 12) Eric Rohmer : *Comédies et proverbes* Volume 1, Cahiers du cinéma, p.101
 - 13) エリック・ロメール『六つの本心の話』（細川晋訳、早川書房、1996年）p.102
 - 14) Eric Rohmer : *Comédies et proverbes* Volume 1, Cahiers du cinéma, p.76
 - 15) Alain Carbonnier : *L'illusion de la liberté*, in *L'Avant scène* 1^{er} octobre 1982, p.5
 - 16) ラ・フォンテーヌ『寓話（下）』（今野一雄訳、岩波書店、2008年）pp.44-46
 - 17) Eric Rohmer : *Comédies et proverbes* Volume 1, Cahiers du cinéma, p.78
 - 18) *L'Avant scène* 1^{er} octobre 1982, p.18
 - 19) 「ある批評家への手紙——『教訓話』シリーズについて」p.103 「言う」（dire）を「語る」とした。訳者のご寛恕を請う。
 - 20) Entretien, Cahiers du cinéma. numero 172, novembre 1965, cité de *Eric Rohmer* par Pascal Bonitzer, Cahiers du cinéma, p.18
 - 21) *L'Avant scène* 1^{er} octobre 1982, p.21
 - 22) Eric Rohmer : *Comédies et proverbes* Volume 1, Cahiers du cinéma, p.92
 - 23) Ibid, pp.98-100 「レストランでの対話」の直後、サビーヌは、母親へ結婚宣言をおこなう。同棲から結婚への移行を当然（自然）とみなす母親からは、相手がサビーヌを愛しているのかどうか分からないような結婚に難色を示す。サビーヌはしかし、「エドモンと真の愛で結ばれたい」、そのためには、「自分から彼の腕の中にとびこむのではなく、彼から望まれたい、そして、彼にも苦しんで欲しい」と主張して譲らない。

